
ひと雫

柿原 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと雫

【Nコード】

N5476BA

【作者名】

柿原 凜

【あらすじ】

Twitterから。お題小説バトル提出作。

使用お題：「扉」「膨張」「新聞」「電話」

新聞のテレビ欄からは、面白そうな番組が見つからなかった。

部屋の明かりをすべて消して、真夏の夜空を眺めるためにベランダに出てみる。

団扇で仰ぎながらマンションからの景色を確認してみる。いつもと変わらない夜景がやけに心細い。その心細さは、独り暮らしからのそれではなかった。もつと空虚を感じる灰色の心だ。

生ぬるい夜風が火照った顔面を時折優しく包み込み、すつと通り抜けていく。ちょうど一年前のあの夏は、この風が勢い強く感じたはずなのに、やけに滑らかな優しい風に戸惑ってしまう。

こんな優しい風を受け止めてしまうと、またあの日の「優しいあいつ」を思い出してしまっじゃない。

優しいあいつと出逢ったのは去年の四月。ちょうど私が大学生になった時だった。

「なあ、サークル入らない？ バスケットのサークルなんだけど、マネージャー足りてなくて」

「えっ」

大学構内の一番大きな掲示板の前で突然男の人に声をかけられた。正直今までスポーツなんかやったことないし、そもそもこの男の人と知り合いではない。なんで私なんだろう。はじめての出会いに疑問符ばかりが頭をよぎっていた。

それからすぐに、バスケサークルの練習に付き合わされた。何をしているのかも分からないまま見守ることしか出来なかった私だったが、男の人はたまに私の方を見て微笑んでくれた。なんだか不思議な気分だ。体育館の中に広がる熱気と滴る汗。初めて見る生のバスケットボールに、私の心は徐々に惹かれていったのを思い出す。スポーツってこんなにワクワクするんだ、って気付いたときには、

同じように彼にも惹かれて行っていたのかもしれない。三時間半の練習時間は、思ったよりも短かった。

その帰り、彼の車に乗せてもらって一緒に帰ることになった。そこではじめて彼の名前を知ることになる。岡原裕也。いたって普通の名前なのに、どうしても忘れられない、心に響く名前。名前を聞いた瞬間から、なぜか急に意識し始めたのもまた懐かしい。あんまり意識しすぎて車の中では自己紹介くらいしかできなかった。

もうすぐ家に着きそうな頃、彼が優しい笑顔で私を誘ってくれた理由を教えてくれた。私がなんとなく掲示板のすぐそばをうるちよるしていたり掲示板に貼ってあるいろいろな情報を眺めていたから、てつきりその中に貼ってあったマネージャー募集が気になっていた。子なのだろうと勘違いしていたらしい。本当か嘘かわからないけど、さすがに最後までお互いに黙り込んでいたので無理して話をしてくれたのだろう。そういう少しだけ優しいところが大好きだった。

夏休みになる頃には、私もバスケのルールを少しは理解し始めていた。大学の前期がこんなに濃くて楽しい時間なんだと感じさせてくれたのは、紛れもなく岡原くんのおかげだった。その頃には私の中のほんの小さな恋心がどんどん膨張していった頃だったし、それに比例するように岡原くんとは一緒にいる時間が多くなっていた。でもこの頃から、岡原くんのある噂が流れ始めていた。

岡原くん恋人がいるらしい。そういう噂をチームメイトから聞いたのは、夏休み中版の合宿のことだった。午後の全体練習が終わり、みんなが夕食へと急ぐ中、それは起こった。みんなの洗濯物を回収し終わり、合宿所の屋上へと向かう途中、ひとりきりの岡原くんとはったり出会ったのだ。岡原くんも屋上に用があるらしく、二人並んで向かうことになった。

屋上へと向かう階段は、一つ段を上ることに二つの足音が鳴り響いた。背の高い岡原くんの足取りはしっかりとっていて、対する私はいつもより華奢に感じる。洗濯力ゴを抱える私は、今が告白のチャンスだと思った。それはもちろん屋上に上ってからでも良かった

けど、改まるとちゃんと言えないような気がするから。でもそれと同時に、こんななんでもない階段で告白するものだろうかとも思ったのは確かだ。さすがに無いよなあという結論に至り、結局屋上で言おうとかなあどと緩く決意した。肩の力が抜けた私。洗濯力ゴの中の洗濯物に顎を乗せてみると、顔中を汗の臭いが襲ってきたので、目元がピクピクつと動いた。そうやって岡原くんのことを考えているうちに屋上へと着いてしまった。その扉が開かれた瞬間、私の中の何かが爆発した。と同時に体が固まった。緩く決意したはずなのに、なぜか緊張感が徐々に高まっていく。人生初の告白でもないのに、どうしても緊張するのだろう。それはそれほど好きなんだって誰かが前に教えてくれたようなきがするけど、でも。考えていることがわけ分らなくなってくる。頭の中は大混乱の末、真っ白にフリーズした。ハツとして洗濯物だけは終わらせようと思ったが、洗濯機まで持つていくのに手も足も顎も震える。洗濯物さえ余分に時間を食っているんだから告白なんてそんな大それたことできない。そう私は決めつけてしまい、岡原くんが屋上でのんびりしているのをただただ横目で伺うことしか出来なかった。

会話ぐらいすればよかったかもなあ。なんて、合宿が終わって家に帰ってから嘆いても遅い。風呂に入ってベッドで布団をかぶつても、まだ岡原くんが胸の中にいる。目の前にぼやけて見えてくる。これが恋の病なのだろうか。やっかいな病にかかってしまったものだ。その日、私ははじめて恋しくて泣いた。もう自分でもどうしようもなかった。ただただ流れていくひと粒ひと粒の涙の雫がじんわりと枕を濡らしていくのを感じるしかなかった。

岡原くんから彼女がいると告げられたのは、それから一週間後。練習試合の帰り道、初めて自己紹介し合った車の中だった。

それから一年。

私は今でも岡原くんのことを想っている。もう一年も経つのに、一向にこの病は治りそうにない。

台所の流し台に水滴が落ちていく音がやけに大きく聞こえる。

涙の雫が一滴、また一滴とズボンに落下していく。涙のシミがで
きそうなそのズボンのポケットをぎゅっと握りしめたまま、私はど
うする事も出来なかった。一年前のあの日のように。

その時、携帯電話に着信が届いた。岡原くんからだった。私は嬉
しい反面、もう終わりにしたかった。

電話に出ないまま、携帯電話を閉じた。夏の夜にふさわしい、涼
しげな風が、カーテンを揺らして涙を拭ってくれた。

ひと雫の涙は、もう渴ききっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5476ba/>

ひと雫

2012年1月14日23時48分発行